滋賀県甲良町の公園づくり　── 住民運動散策Ⅰ ──

別府大学文学部教授　　秋田　清

Ⅰ．はじめに

別府大学地域社会研究センターは、98年9月から99年3月まで、読売新聞西部本社と共催で、公開講座「別府湾」[1]を開催した。下記は、その終了にあたって、採択した「提言」である。

公開講座「別府湾」提言

環境について

私たちが学んできた自然環境、あるいは風景というものは、自然の事象であると同時に、人間の生活と結びついた社会的な事象であると言える。その結びつき方は、経済活動の延長線上に環境問題を考える人もいれば、遊びやレジャー、精神のリフレッシュに自然を利用する人もいる。様々な捉え方ができるが、一人ひとりの暮らしと切り離せない環境を、私たちの時代で使い切ってしまうわけにはいかない。

楽しみを共有

環境について考えること、何かを行うことは、基本的に「楽しい」作業でありたい。だれのためでもなく、自らの生活を豊かにすることだからだ。身近にある環境問題を、地域の人たちと楽しんでみよう。使命感や正義感、悲壮さを漂わせるのではなく、明るく、わいわいと、取り組んでいこうというのが私たちの提案である。多くの人と、この楽しみを共有することができれば成功だ。

住民の役割

自らの地域の問題は、自らの手で解決するという原則をあらためて確認したい。受け身であることになれてきた住民にとって、意見を表明しなければいけないということは重荷に感じるかもしれない。住民自らの手で情報を集め、意見を集約し、人を組織化していくといった大仕事を担う「覚悟」も必要になった。

連帯こそ大事

一面では地域は、地縁、血縁などによって縛られ、自由に動くことが難しいという現実も見過ごせない。だからといって、考えるのをやめ、立ち止まるのではなく、地域の外にネットワークを求めることを提案する。別府湾を中心に、湾岸の人たちが力を合わせ、さらに、水を介すれば、川をさかのぼり内陸まで連帯の手を伸ばすこともできる。環境を通して未来を共有する大きな地域の中で、私たちが暮らす周辺地域を

---

[1] URL: http://www.yominet.or.jp/beppu

考えてみよう（99/03/11）。

また、私は「地域環境学の薦め」において次のように述べた。

「個人の生活を中心に、それを取り巻く外的自然、生産や流通、社会福祉や学校などの教育制度、自治体行政や諸地域組織のあり方を、地域環境として捉え、その改善の方途と個人の生活の在り様を探るものとして、地域環境学というものがあっても良いのではなかろうか。それは、単に抽象的な学としてではなく、諸個人間の交流とネットワークづくりとして存在しうるのではなかろうか」[2)]。

こうした確認を元に、私は、しばらく各地域の住民運動を訪ねることにした。以下はその報告である。

今回は、福岡県地方課のＮ氏、福岡グランドワークトラストのＯ氏の紹介で、滋賀県甲良町のまちづくり課のＮ氏、甲良グランドワークトラストのＴ氏を訪ねることが出来た。

Ⅱ．甲良町公園散策

８月25日、尼子駅についたのが９時過ぎ。無人の田舎の駅だった。しばらく行くとたばこ屋があった。

公園のことについて訪ねると、少し顔がほころんで、それぞれの地区ごとに「せせらぎの公園」があることなど説明してくれた。「蛍の森」と「かぶとの森」の場所を聞いて、暑い夏の陽をさえぎるものが何もないアスファルトの道を歩き始めた。

道行く人は、余所者と一見して分かる私の姿を見て、ほとんどの人が挨拶をしてくれる。「何しにきたの」という顔をしている人もいる。

荷物をトラックから店に運び入れている５，６人のおばさんに、カメラの電池を売っている店を尋ねた。直接尋ねた人は、この忙しい時に、という顔をしながら答えてくれようとしたが、後ろからきたおばさんが、説明を買って出てくれた。

「この道をずっと行くと、コンビニがあります。その前に、○○八百屋があるし、○○薬屋も、○○洋服屋もある。ちょっと行って、左。」さしあたりコンビニかと思って歩き始めると、後ろから声がする。「すぐにありますよ。八百屋は○○で、薬屋は○○、洋服屋は、、、。いろいろ店もあるし、何でもありますよ。この道まっすぐ。」

田舎の人の「ちょっと行って」は遠いからな、などと考えながら歩いていると、八百屋も、薬屋も、洋服屋もすぐにあった。しかし目指すコンビニは、一向に現れない。１km くらい歩いて諦めた。細い路地を通って、別の道に出た。農作業をしているおばあさんに尋ねると、「あの信号を左に曲がって、100m」。今度は計ったように、100m くらいのところにコンビニがあった。

コンビニに電池はなく、近くのスーパーを教えてくれた。食料品、衣料品、薬、酒類な

---

2)「地域環境学の進め」（『地域社会研究』別府大学地域社会研究センター、創刊号、1999年）

んでもそろっている。電池もあった。でも、この黄色いケバケバシイ壁の色はなんだ。「あの黄色い看板なあに」のあの黄色だ。後で、役場の人に訊いたら、周囲との調和を考えてほしい旨の申し入れをして、周囲に木を植えるということで妥協をしたが、実行されないということであった。

スーパーの場所を知らない他所の人がそんなに多く来るとは考えにくい場所で、ただ目立つことだけにそれほど意味があるとは思えない。安っぽい色で、商品の安さを強調するのは今は流行らない。目立ち方にもいろいろある。むしろ高級感をただよわせて、安い商品を売るのが今の流行りである。スーパーも例外ではない。スーパーの近くにある消防署でさえも、上品な造りと色になっている（これは役場との話し合いでかたちと色を変更したそうである）。

そのスーパーで電池を買って、店員に尋ねたら、すぐ裏に、「高虎の森」(「甲良三大偉人」の一人、藤堂高虎を記念した公園)という公園があるということであった。早速行ってみた。ここは比較的良く整備されている。この日は水も豊富で、藤棚が作る日陰も良い。用水路の上に作られた東屋も良い。

近くの八幡神社までは歩道も石畳で、並木もあり、これほど暑い日でなければ、良い散歩道である。両側に狭い歩道を作るのではなく、片側に広い歩道を作るというアイディアも良い。他のところでも見られるが、家々の塀の外や水路の上にプランターを置いて、花を植えてある。町役場から補助金を出して、奨励しているそうである。

しばらく東屋で休んで、「かぶとの森」に歩いた。途中農作業をしているおじいさんに尋ねた。

「あの森は、なにか名前の付いている公園か何かですか？」

「いやあれは墓です。木をみんな切ったら、寂しくなるので半分残して、小屋を造って、カブトムシを飼って、かぶとの森とか何とかいっています。」

こういうのがいい。決して誇らしげではない。ちょっと恥ずかしげに「かぶとの森」などと言うほどのものではないけど。まあいいじゃないですかという感じである。

「道もちゃんとあるけど、たんぼ道でよければ、真っ直ぐ行きなさい。」

「畔道通っていいですか。」

「いい、いい」。

しばらく進んで、迷っていると、後ろから、「そこ真っ直ぐ」と声がした。頭を下げて、畦道を真っ直ぐ進んだ。

森まで来ると、おばあさんが墓の花に水をやっていた。墓が建っている部分だけ、樹が全くなく、夏の日が照っていた。

「墓があつそうですね」と私。

「どこでも暑か」とおばあさん。「あついばっかり。ほんとに暑か。」

「別府から、公園を見に来ました。」

「どこから？」

「大分県の別府です。公園がきれいだと聞いたので、物好きに見に来ました。」
「それは遠いところから。あついね。」
おばあさんもまだ話しをしたそうであったが、カンカン照りのアスファルトの上では、ちょっと悪い気がして、止めにした。

おばあさんには通じなかったが、こんもりと茂った森の陰から、追い出されたようにして並んでいる墓石が、何か気の毒な感じだった。

森に入ると、すぐ左手、溝の反対側に 4m×2m×2m くらいの金網で囲った小屋がある。これが、「カブトムシの小屋」である。こちらの道には、「ヘビがでるぞ」と書かれた杭がある。しばらく行くと「ハチがでるぞ」と書かれている。大きな樹の下には藪が茂り、いかにも出そうな雰囲気である。こういうところは嫌いだ。早々に広いところに戻った。

好みの問題かもしれないが、自然を大事にというとき、しばしば人の手を加えないで、と考えがちである。たしかに、ヘビが出たり、ハチが出たりするところもあっていい。しかしそういうところは、長靴をはいて、網をかぶって行きたい。気楽に立ち寄るところではない。

ここは、たまたまほとんど人が利用しない真夏なので、こうであったのかもしれないが、一般論として言うと、たとえば、雑木林が、人の手を加えて初めて成り立っていることは、しばしば忘れられがちである。放置されれば、下草が生え、しばらくすると藪になる。人が立ち入りにくくなり、藪を払ったり、下草を刈らなくなったり、利用しなくなれば、新しく吹き出た新芽は育たず、雑木林は破壊される。神社の森も、鎮守の森も、お寺の木立も、人の手が入って初めて維持されているものである。素朴な、あるいは狂信的な自然崇拝思想は、人間もまた自然の一部であることを忘れている。われわれの周りにある自然は既に人間化された自然である。われわれ人間は、所詮人間の生活を中心にした思考しかできないことを自覚しておいた方が良い。

時と共に、木々は自然に成長し、それにその時そのときに人々の手が加えられ、人々の生活に馴染んでくる。そうして、その地域の生活の中で作られていく姿にわれわれは安らぎを感じるのである。

スーパーに戻って、弁当を買い、その中にある、閉鎖された軽食喫茶の片隅で昼食を取り、役場を訪ねた[3)]。

Ⅲ．甲良町役場

役場につくと、N 課長は留守であった。別の来客の案内で、外に出ているということであった。職員の方が連絡をとってくれて、すぐに戻るとのことだったので、部屋の作業机

---

3) 残りの公園は、翌日回ることにしたが、歩いて一日では回りきれないし、足も疲れていたので、タクシーを使うことにした。

で、ワープロを打ちながら待たしてもらうことにした。

しかし、考えてみると、役場の人たちにとっては、迷惑なことである。活動がどこかで紹介されると、すぐに私みたいな無遠慮な客がくる。そのために割かれる時間は相当なものである。この日、私のためだけでも、16:00 からの会議直前まで3時間近く付き合ってくれた。

以下は、N氏の話と、その時にいただいた資料からのものである。

甲良町は、琵琶湖の東部犬上郡にある、面積 13.66 平方キロメートル、人口約 8,600 人の兼業農家の多い農村地域である。

ここでのまちづくり運動、「せせらぎ遊園のまちづくり」が本格的に始動したのは平成2年に町内全集落に「まちづくり委員会」が設置されてからである。この運動が動き始めるにはいくつかの契機があった。

町は長い間、赤字財政にあえいでおり、住民の間には町政への不満や諦めの雰囲気があった。このことは後にも触れるように、住民が自らの町は自らで作るという気運を生み出した。

また、解放同盟を中心とした運動もあり、現在でも、「住民主体のまちづくり」とともに、町政の重要な柱となっている「人権尊重のまちづくり」（人権尊重のための意識づくり、共存しあう社会づくり、人権行政の体系づくり）の基礎となっている。

こうしたなかで、1981（昭和 56）年から、滋賀県による圃場整備事業が開始される。それは、集落内の水路のパイプライン化を含んでおり、事業の進展のなかで、旧来の農村景観や生活環境が様がわりしてゆき、住民のあいだに、環境悪化への危機感を生み出した。

1982（昭和 57）年には、「犬上地区環境検討委員会」が設置され、環境アセスメントを行い「甲良町農村景観構想」が打ち出された。保全と開発の葛藤の始まりである。この年にはまた、財政健全化計画が策定され、町政の暗いイメージから明るいイメージへの転換が計られていく。

1989（平成元）年には「農業水利施設高度利用事業」を切っ掛けにして、まちづくりに専門家が関与することになり、住民参加のまちづくりが、住民、行政、専門家のパートナーシップによって始まる。この年、竹下政権の下で各自治体に交付された、1 億円の「ふるさと創生」資金が有効に活用されていくことになる。まちは各集落にこの資金のなかから、100 万円を支給し、「むらづくり推進事業」を提起する。

1990（平成 2）年には「甲良町総合計画（夢現計画）」が策定される。その過程で、土地利用、道、水系、生態系、生活系などについての集落点検が行われる。「躍進するせせらぎ遊園のまち」をキャッチフレイズとするこの計画には次のような事業が含まれている。

＊ 水環境整備事業（親水性公園 14 箇所、親水性水路 8 路線）

＊ 地域づくり推進事業（景観道路 5 路線、集落中央広場 1 ヶ所、虫たちの森 3 箇所）

＊ 農村総合整備モデル事業（集落道、排水路、コミュニティ施設）

＊　都市計画公園整備事業（運動公園）

こうした事業は各集落につくられた「むらづくり委員会」が中心になって、行政や専門家との協議を通して、住民による計画の作成と、計画の実行の際には、ボランティアとして作業にかかわっていく。

またそれを支えるものとして、「夢現塾」が組織され、平成元年から町の事業に関与していた専門家を講師として招き、住民の中から塾生を公募して、学習活動を行っている。ここに参加した人びとが、各集落の「むらづくり委員会」の中心的担い手となっていく。

こうした活動のなかから、1993（平成５）年より、甲良グランドワークトラスト結成の準備活動が開始される。

行政と住民は現在、「緑のネットワーク、水辺、生態系、世代間の連携」を目標にした「生態系に配慮した整備計画」の実現に向けて、活動を続けている。

―― 住民が積極的に参加できたのはどうしてか、という問に、Ｎ氏は、つぎのように語ってくれた。

＊　赤字再建団体転落の危機に陥ったことがあって、当時の収入役は、赤字再建団体になるための講習会に行った。その報告を聞いて、これはダメだ、そうならないで、再建の道を探ろうということになった。県に窮状を訴えることもしたが、町が主体的に、自分たちの手で再建していこうという気運が生まれた。圃場整備にしても、土地改良組合を作って、自分たちの手でやろうとした。

＊　具体的な町づくりが進む過程で、大学人や学生など、外部の人が入ってきて、彼らとの交流や、街の住民の独自の学習会も意味を持った。

＊　また、行政には一般に「平等性の原則」というのもがあるが、自分たちは、それを部分的には無視して、やれる集落から進めていった。このことは、各集落が他の集落よりも良いものをという競争心を生んだ。

＊　現実の過程では、必ずしも、聞き入れることが出来ないような意見もあって、調整に手間取った。そうしたときには、計画実現の推進を優先させることもあった。

＊　町の規模が小さかったことも、住民が参加して、主体的に事を運ぶのに良い条件だった。全体で人口が約 8,600 人、大きい集落で 600 世帯、小さい集落は 30 世帯。全町に説明に行くにしても、13 日で済む。これくらいの規模だと全体の動きがお互いに見える。

―― Ｎさんが、この仕事に打ち込めたのはどうしてですか、という問に。

＊　一言でいえば、面白かったから、ということになるのでしょうけど、それは単に面白かったという言葉では済まされない、いろんな苦労がありました。それも含めて面白かったと言っているわけです。

自分は、行政の一員であると同じに、グランドワークの一員だし、住民の一員なのです。作業の過程では、みんな仲間として活動するわけですから、それは楽しいですよ。

どなたか、住民運動に携わった人を紹介してもらえませんか、という申し出に、「それなら今から行きましょうか」と快く、甲良グランドワークトラスト（準備会）のＴ氏を紹介してくれた。以下は、Ｔ氏のインタビューの概略である（言葉は必ずしも正確ではない）。

Ⅳ．甲良グランドワークトラスト

―― ここの公園づくりの運動が面白そうだと思って、お尋ねしたのですが、おおよその経過については、役場のＮさんにお聞きしました。

まあ、役場の方は、それがいわば仕事としてでもやれるわけですけど、そうでない住民の方は、それで、給料もらっているわけでもないし、儲けになるわけでもないわけですね。それでもなお、公園づくりなどに参加されるというのは、どういうお気持ちからなんでしょうか。

＊　人それぞれいろいろ思いはあると思いますが、自分が住んでいる所が良くなるというとはいいことだと、誰しも思っていることですよね。甲良町の場合は、長い間、財政的にも困難な時期があったので、行政には何もやってもらえんもんだという意識は大半といって良いくらい多くの住民がもっていました。そういう中で、自分たちの地域は自分たちでやれるという切っ掛けを与えてもらったのです。行政の方から、ああしなさいこうしなさいということではなかったので、ある意味自由に、お金を使わせてもらえたということでしょうね。

それと、13 地区の住民が、あそこの地区には負けんぞという、良い意味での競争心が働いたということでしょう。

自分の家でもそうじゃないですか。綺麗になったり、住みやすくなったりすると、やっぱりいいし、地域だって、それが広がっただけで。

―― でもなかなかそうは考えないのが普通のような気もしますが。

＊　そう、だから、信号で止まると、車のドアを開けて、吸殻を捨てたり。でも、もともと日本人が持ってるものは、公共物を大切にするという意識じゃないですか。子どもの頃はそういうことを教えられましたよね。だから、お寺さんでも、神社でも、公民館でも、みんなが集まるところは大切なところ、大事なものとして扱ってきたけれど、最近は、学校の窓ガラスが何十枚も割られたり、困ったことですね。

でも、本来的には、汚いより綺麗なところがいいし、住みにくいより住みやすいところが良いわけなんで、それは解り切ったことなんですよね。だから、昔から、道づくりとか、春になると水路の掃除とか、田舎ですから、みんなが出て、共同でやる福祉作業、ボランティア作業というのはあったわけです。そういうのがあったので、ブツブツ言いながらでも結構やってもらえますけどね。

―― なるほど、そう言うものかもしれませんが、昔から、水路の掃除とか共同でやる

んですけど、みんなでやった後で、自分の田んぼに流れてきた水を、下の他所の田んぼに流さずに、横から捨てちゃうということもあったわけですね。

＊　ええ、ありますね。そういう「エゴ」、「我」というようなものがいつの時代にもありますね。

―― でも、良いことばかりじゃなかったのでしょうが、ここの公園づくりなどテレビで見てると、みんな楽しそうにやってますね。

＊　そう、やりだしてみると結構みんな、面白いという部分はありますね。それと、こういうもの作るから、手伝いなさいということだったら、まずそうはなかなか行かなかったと思いますが、計画段階から、頭突き合わせて、膝交えて、ああでもない、こうでもないといいながら、やってきましたから、大きい事業になると業者が入ってやりますけど、自分たちでできること、これは自分たちでやろうかとか言って、やってきましたから、それは計画段階から、公園を作るということに携われたからでしょうね。

それが、設計図も出来て作業の段取りも決まって、手伝いなさいということだったら、反感を持ったでしょうね。全体が、自分たちのものを造っているという気持ちがあったからでしょうね。自分たちのものを造ってもらっているということだったらまだ良いけど、なんや知らんけどつくっとるぜというのが今までの公共事業ですよ。

自分たちが使うわけですから、自分たちもかかわりを持ちたいですよ。それがある意味させてもらえたわけですから、1,000 万の予算ではここまでですよ、ということになると、足らない分は自分たちでやろうかということになりますよ。それが出来あがるとうれしいですから、また次あれしようかということになります。新しい発想も次から次に出てきますよ。

―― でも、これまではそういうことほとんどできてませんよね。

＊　われわれは、グランドワークで、パートナーシップとかいうてますけど、業者が、パートナーシップでやりましょうか、と言うても、それに乗ってくる住民が居ないとダメだし、楽しくないと誰も乗りませんよ。パートナーシップでやることの意義とか楽しさとかが理解されてないとダメだと思います。

それが、行政とか県とかになってくると小さなものやってては目立たないとか、ちょっと大きなものやろうということになってくると、なかなか参加はしてもらえない。だから、一坪か二坪のものでいいから、みんなで協力しながら、知恵出し合いながらやるという、火種みたいなものを作るということが大事だと僕は思います。それがだんだん大きくなるということやと思いますわ。

―― ええ、やり出すとたしかに、面白いということになりますが、参加している人は、サラリーマンであれ、農家であれ、仕事や家のことでどうしてもやらなければならないことがありますね。だから、金で済むことならば、そのほうが合理的だとも言えますよね。そうすると、もうあきたから止めようということにもなりますね。それを 10 年とか 20 年とか続けていけるというのには、個人の場合でも組織の場合でも、難しさがあると思いま

すが。

＊　ええ、そういうことが一番問題になってくると思いますが、公園づくりとか水路の整備とかが終わるときには、次何しようかということになりますが、そんなに次から次にやることがあるわけじゃないし、後は維持管理とかいうことになってくるので、なんやいろいろ造ったので、維持管理なんかばかりやらないといかん、ということが出てきますね。

でも、自分たちが作ったという自負があるから、ブツブツいいながらでもやって行けると思いますがね。お金で造ったものなら、飽きたから別のものに作り変えようかということになるかもしれませんが、自分たちで作ると、ものの大切さとか出てくると思います。

確かに、これから10年とか20年とかいうことも考えておかないといかんことでしょうけど、まあ何とかなるでしょう。

公園にしても、業者は、ある程度完成された形に最初からしたい、樹なんかにしても、大きい樹の方が良いですよとか言うのですけど、出来るだけ地元にある苗木を植えたんです。それがだんだん年と共に大きくなっていく。ここにもう一本樹を植えといたほうが、と言うけれど、いやここは子供たちが次々に卒業していくので卒業記念の植樹をするのだといって空けておいたわけです。そういう形で継続していけるかなとは思っていますが。

―― なるほど、ちょっと話は違いますが、われわれの大学は、7、8年前に大分に新しいキャンパスを造ったのですけど、校舎の周りは全部日本庭園になっているのです。最初は、大学にこんなもの造って、何考えてるんだとか言っていたのですけど、これが、6、7年も経つと樹も大きくなってくるし、石の色も変わってくるし、回りの景色にとけこんでくるのですね。

今日は、尼子駅から歩いてきましたが、所々に、神社の回りなどに、古くからの森がありますね。あれと新しく造られた公園を比べると、それが10年たつとまた違ってくるとは思いますが、とてもかなわんなという気がしますね。その魅力が何だろうと思って歩いてきたんですけど。

＊　それはそうですよ。100年、200年、それ以上の歴史の中で造られてきたものですからね。あれも、最初圃場整備のときになくなる予定だったのです。われわれ「水」というものに苦労してきた割には、有って当たり前と言う気になっていて、気にも留めなくなっていたのですが、大学の先生がたが、こんな水路に恵まれたところはないとかおっしゃるので、一度集落点検をしてみようということになりました。地図の上にいろんな物をおとしていったのです。そうしたら、なくなっているものが多くて、これは残っているものは残さないといかんと思ったのです。森にしても、農工大のS先生などが、自分の歳より歳とってる樹は切らないほうが良いですよというので、改めて見て、なんや宝物見つけたような気になって、物の価値観が変わったのです。みんななくした方がすっきりするけど、それよりもっと大事なものがあるということになったのです。それで残そうとしたのですけど、いろいろ議論がありました。

ある森を他のところに移そうかという話になったとき、いろいろ議論があって、なかな

か決まらないので古いやり方なのかも知らんけど、いっぺん、行くか行かんか、神さんに訊いてみようということになって、そしたら、神さん行かんということになって、神さんがいかん言うとるからしゃあないということになって、残りました。あれ、神さんどこでも行く言ってたらどうなったんやろうなと思うんですけど（笑）。

100年200年かかって出来たものを、一旦壊したらもう出来ませんからね。それだけの時が流れんことにはね。

―― 実は、内の大学に文化財学科というのが在って、「環境歴史学」というものを提唱している人たちがいます。人と自然のかかわりの中で造られてきた自然の風景全体を、文化財（どうも、この「文化財」という言葉は、わたしは嫌いなんですけど）として捉えて、それが人びとの生活や、気持ちに与える影響を考え、現在の人びとの生活、人と自然のかかわりの中で、保存していこうとしています。

＊　まさに言われるとおりで、そっくり残そうとすると、犠牲が大きすぎますよね。今に生きている人にとっては犠牲が大きすぎるんやけども、でも、現在の生活に都合の良いように何もかも造りかえると、今度は自然に対する犠牲が大きすぎますよね。だから、譲れる範囲というか、もしそれがあった方いいんだったら、残せるものは残した方が良いし、戻せるものは戻したら良いいうんか、これが、くぎ一本、樹一本動かしたらいかん言うんやったら、何や窮屈なことになって、それぞれの時代の生活に必要なことやったら、合うたように変えて行かんといかんし、けれども、その時代に合うたようなことだけを考えていたんでは、未来の人にまことに申し訳ないことになるということなんですよね。どこまでが譲り合えるかということなんですね。

樹は何も言いませんからね。樹に訊きに行くわけにもいきませんから、そこは人間が判断せんといけませんからね。

―― そうなんですね。現在の人間が判断せんといけませんからね。文化財学科の人たちは現在の環境を歴史的に捉えて行くということをやっていまして、私は人間関係学科というところに所属していますが、ここでは、福祉とか心理とか教育とかあるんですが、環境を自然環境だけに限定しないで、一人の人間が生きていく上でその人を取り巻く社会的な環境を問題にして、地域社会のあり方を考えています。二つの学科が、それぞれの立場から、環境というものを見ているわけです。そう言う意味で、こちらの動きは面白いと思ってきたんですけど。

＊　そうですね。最近の子供たちの問題にしても、国がどうのこうの言う問題ではないんですね。昔やったら、家族はもちろん、隣近所の人、地域の人がお互いにやってきたことが、プライバシーだとか言って、そういうものが忘れ去られてきたんですね。それは単に、少子化とか、老人が増えたとかいう問題ではないんですね。

―― ここの場合は、まちの財政が破綻したという、「恵まれた」条件がありましたから（笑）。

＊　そうです。そうです。やっぱり、裕福で何かをやろうというのじゃなくて、どん底を

見てきましたから、うれしかったんですよ。裕福やったら、なんや100万くらいもろたって、ということになったと思いますが、100万もらって、さあ、どういう風に使おうかと四苦八苦して考えましたから。

―― ええ、ところが、これまでは、国が悪いとか、行政がせにゃいかんことだとか、国や行政を批判してれば、何かやっているような気になっていましたよね。

＊　そうですね。戦前の軍国主義から、民主主義かなんか知らんけれど、権利ばかり主張して、義務ははたさん、ということになってますよ。そんなんは民主主義でもなんでもないと思うんですけど。まあ、もうちょっと時が過ぎんとわからんことかもしれんけど。

このあとさらに、行政と住民との関係、グランドワークトラスト、専門化と素人について、大学（学生）と地域の関係などについて、甲良町の場合どのように展開してきたか、に話が及んだが、ここでは、省略する。

Ⅴ．一応のまとめ

私が甲良町にいってみようと思った切っ掛けは、「行政がやらなければ、自分たちでやろうということで、住民が自分たちで公園を作ってしまった」というように聞いたからであった。事実はかなり違ったが、この運動に参加した指導的立場の人たちの口からは、「行政は頼りにならん」という言葉が、簡単に出てくる。それは既に述べた事情もあるが、役場の呼びかけに応じてであれ、自分たちが計画から、実行まで主体的にやりとげたという事実とその自負からくるものであろう。

かつて多くあった様に、国や行政の批判をしていれば（そしてそれで票を稼げれば）、それで何かやったような気になっていたのとはずいぶん違う。また、「住民参加」という言葉に対して、その言葉はおかしい、本来住民が主体であるのだから、「行政参加」ということでなければならないなどという人がいる。言葉遊びの面白さはともかく（問題提起の意義は認めるにしても）、意見や利害を異にする人々が集まった集団の、組織のあり方や、その現状を無視したもののように私には思える[4]。

甲良町の場合も、国や行政の動き抜きにはなにも起こらなかったであろう。ただ、一旦、住民が自分たちで何かをやったという自負が生まれれば、今後はさまざまの動きが予想される。その時、行政が、住民の動きのなかで、行政と無関係に始まったものでも、面白いものを援助し、他に知らせるという活動を行えるかどうかが問題であろう。

---

[4] それは、最近流行りの「生涯学習」という言葉にもみられる。「生涯教育」という言葉が、押し付けているみたいだから、自ら学ぶことの大切さを強調するために、「生涯学習」という言葉に替えるというのである。何のことはない、「自ら自発的に学ぶこと」を強制されているに過ぎない。

かつての「個性教育」によって、無理やり「個性」を作らされたのに似ている。いったい、教育の問題はどこに行ったのか？教育を行うものは、教育の問題を、そのあり方の問題として、引きうけなければ、なにも生み出さないだろう。

また、公園づくりは、そこにとどまらず、生活のさまざまの場面に広がっていく可能性を持っている。公園づくりと他の、例えばごみの収集とは違うけれど、公園づくりにおける考えかたは他の生活にも影響を及ぼす。こうした広がりのなかで、新しい住民の生活規範をも作り出していくであろう。その時、一般論としていえば、住民の組織が、「五人組」や「国防婦人会」のように、相互監視組織として機能する可能性もはらんでいる[5)]。こうした動きをどうやってチェックしていくかも問題であろう。その意味で、住民の組織（運動）が、開かれた組織（出入り自由の組織<運動>）として運営されていくかどうかを見て行きたい。

甲良町は、古くからあるさまざまの「森」を残し、新しく造られた公園も、豊富な水を使い、ふんだんに自然石を使い、一つひとつの公園は、心地よいものになっている。しかし、既に述べたように、たまたま私が訪ねたとき、真夏の暑い日であったので、そうであったのかもしれないが、必ずしも管理が行き届いているとはいえない状態であったし、利用する人がどれくらいいるのだろうか、と思わせるような雰囲気があった。それは、一つひとつの公園の立派さが、町全体の風景から浮いているような印象を与えていることと無関係ではないように思える。

その一部の改善は、既に進められている、公園と公園、公園と集落を結ぶ散策できる道の整備によって可能であろう。しかし、公園や古い森が本当に生きるためには，それぞれの管理だけではなく、現在の人々の生活に合わせて、それらのものをとり込んで行く、長い作業が必要であろう。

つまり、これまで行われてきた国や県や市町村が行う公共事業が持っている総合的な観点や合理性ではなく、住民の日常的な生活を出発点にし、その心地よさを基準にした、そこから常に離れない「まちづくり」が必要である。「総合計画」の補完としての「まちづくり」ではなく、住民の生活環境（教育、障害者福祉、憩いの場、自然環境など総体としての地域福祉）の改良の補完としての総合計画が必要なのである。

また、こうした過程で、気候風土や、歴史的に形成されてきた環境、風景をどれほど保存し、活かせるかが問題であろう。最近、環境問題に関して、それは脳と遺伝子の対立である、というようなことが言われることがある。脳が、経済的利害や合理性を追い求めて環境を変えてきたが、過去に生きた祖先たちのなかに刻まれた生活とそれが作り出した風景は、現代に生きるわれわれにもその遺伝子のなかに影響を及ぼしており、そこから離れることを拒否しているというのである。

---

5) かつて、私も、地域の子ども育成会の廃品回収作業に参加したことがある。そこで、お母さんたちの雑談のなかで、「あそこの家は、先週ビールを１ケース買っていたのに、空き瓶を出さなかった。たった100円くらいのお金がほしいのやろうか。ほんとにケチやねえ」。その活動の目標のひとつに、「子供たちに共同作業の楽しさを教える」というのがあった。何のことだ。

これがこの場で終われば大したことはない。しかし、腹いせに行われるひそひそ話が広がり、周囲の人のビールを買った家の人を見る目が変わり、よそよそしい雰囲気が流れる可能性は絶えずある。

最近では、ごみの分別収集で非難され、ノイローゼになって、ごみが出せなくなった主婦がいる。

遺伝子に組みこまれているかどうかはともかく、現代に生きるわれわれもまた歴史的に形成されてきた存在である。われわれは、変えてはならないもの、残して行くべきものを、われわれの感性で判断することができる。あるいは、そうせざるを得ない。それを私は「好き嫌いの問題」と表現している。それは、普遍的なものを追いかけてきたこれまでの研究者や洗練された専門家たちの感性と異なった地域住民、素人の感性の中に存在している。たしかにそれは種々雑多な付随物を含んでいる。しかし、それを含めて生活が生み出す感性である。そうしたものを生かせるかどうかが、そこでの相違にどうやって折り合いをつけていくかが、問題であろう。

人間と自然、人間相互のいがみ合いとその折り合いの過程こそが、年輪と呼ばれるものであろうし、自然の想いと人間の想い、過去の人々の想いと現在の人々の想いの相克のなかで、つまりは人々の生活のなかで風景は創られていく。

それは決して、綺麗なもの、美しいものだけではない。弱いもの、醜いもの、汚いもの、いかがわしいものを含んでいる。果たそうとして果たせなかった過去の人々の想いが、甦らせようとしても甦らせることの出来ない過去の人々の生活が、森や川の流れ、変色した岩や苔に棲みついている。そうであるがゆえに、われわれは過去の人々の生活が造ってきた風景の中に、やさしさを感じることが出来るのではないだろうか。

再建された建物ではなく、壊れ朽ちはてつつある瓦礫の方が、われわれに存在感を持って迫ってくる。引き受けようとしても引き受けることの出来ないこの存在感に対する想い、畏れが新しい風景を形作っていくのかもしれない[6]。

---

[6] こうした想いを欠いた「美しい街並み保存」や「祭りの復活」は、単なる茶番である。